

仏教論理学派アポーハ論の研究
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：d146630
氏名：中須賀美幸

2018年11月30日

本論文は、ダルマキールティのアポーハ論を存在論・認識論という二つの観点から分析し、その構造を説明するものである。

まず、第1章では、アポーハの存在論的解釈である差異について、以下のことを明らかにした。まず、差異には、〈1. 複数個物に対する概念の同一性を説明する原理〉と〈2. 単一個物に対する概念の多様性を説明する原理〉の二つの側面がある。〈2. 単一個物に対する概念の多様性を説明する原理〉としての差異については、次のようなものがある。単一の〈音声〉に対して、「努力の直後に生じるもの」「聞かれるもの」という複数の語が使用される場合、これらの語はそれぞれ、努力を原因としないものからの差異、聴覚的認識を結果としないものからの差異に依拠して、使用されている。一つの実在物 X は他者の数だけ差異を持ち、一つの語は一つの差異しか示すことができないから、単一の実在物に対して、複数の語が同義語となることなく、使用されることが可能になる。一方、〈1. 複数個物に対する概念の同一性を説明する原理〉としての差異については、次のようなものがある。複数の〈木〉に対して、同一の「木」という語が使用される場合、この「木」という語は、燃焼作用を結果としないものからの差異に依拠して、使用されている。この場合、複数の〈木〉は相互に異なるが、燃焼作用を持たないものからは等しく差異を持つため、同一の語の使用が可能になる。さらに、色・味・香・感触の集合体に対して、単一の「壺」という語が使用される場合についても、この原理によって説明される。すなわち、水保持という結果を持たないものからの差異に依拠して、「壺」という語が使用される。

この差異の持つ二つの側面と、親和性の高い分類法として、ディグナーガのUPPにおける仮設有の三分類がある。これは、実在物に依拠して構想された概念を、空間／時間、単一性／複数性という二種の対比を軸に、〈集合体〉〈相続〉〈特定の状態〉の三種に分類するものである。実際、PVSVにおいて、ダルマキールティはこれを語の分類法として採用している。一方、VNにおいては、この分類のより発展したものが確認される。ここでは、空間／時間の対比がなくなり、単一性／複数性の対比のみがみられる。ダルマキールティは、分別知・語の「多様性」(bheda)と「同一性」(abheda)として、この対比を説明している。そして、ここでのabhedaは〈単一性〉と〈同一性〉の二種の意味を含む。これにより、ここでのbheda/abhedaの区分は、差異の持つ二つの側面と完全に一致したものとなる。

次に、Dreyfus [1997], Dunne [2004] によって提示されているダルマキールティの存在論に四つのレベルについて検討し、ダルマキールティの存在論には三つのレベルがある、ということ提案した。この提案は、Dreyfus [1997], Dunne [2004] の提示するレベル2——処が実在として認められる——とレベル3——原子のみが実在として認められる——が同一対象に対する二つの観点として一つのレベルに統合可能であることによる。そして、それは〈処としての独自相／実体としての独自相〉という対比に根拠づけられる。

さらに、ダルマキールティの差異の理論と相関して論じられる全面的知覚の理論について検討した。ダルマキールティは、実在物は単一無部分であるから、知覚はそれを全面的に理解すると論じている。一方、確定知と呼ばれる推理・知覚判断は、それを付託の排除を通じて部分的に理解する。この全面的知覚と部分的確定という対比は、ディグナーガにはみられないもの

である。PS 1.5 およびそれに対する PV の言明は、ディグナーガとダルマキールティの間で、知覚は部分的理解を本質とするか、全面的理解を本質とするか、という点に関して見解の相違があったことを示すものである。ただし、「属性」「属性保持者」の意味は、両者において異なっている。ディグナーガは感官知に関する言明においてと推理に関する言明においてでこれらの語を異なる意味で使用していたのに対して、ダルマキールティは全て同じ意味に統一している。それ故、ディグナーガの場合、知覚論の文脈でこれらが使用される時、感官知によって全ての境を全面的に理解することはないことが意図されているのに対して、ダルマキールティの場合、感官知によって推理の主題を全面的に理解することが意図されている。そして、五種の感官知はそれぞれ一つの境しか知覚しない、という主張に関して、両者の間に見解の相違はない。この意味では、ダルマキールティの全面的知覚は成立しない。

続いて、第 2 章では、ダルマキールティのアポーハ論を、認識論の観点から、特に機能の側面に着目して、分析を行い、以下のことを明らかにした。まず、ダルマキールティによるアポーハの認識論的解釈である〈付託の排除〉の議論を確認した。ダルマキールティは推理と知覚判断とを「確定知」と呼び、推理が付託の排除を対象とすることを論じた後で、知覚判断もまた付託の排除を対象とすることを説明している。ただし、「付託の排除を対象とする」という言明が意味するものは、推理の場合と知覚判断の場合とで異なっている。推理の場合、それは付託を排除する機能を持つことを、知覚判断の場合、確定対象である差異に付託が欠如していることを意味する。推理は錯誤知が起こった後に、誤った付託を排除するために生じるが、知覚判断は知覚直後に錯誤知が起こらなかった時に生じるからである。

次に、カルナカゴーミンの解釈を分析することによって、「判断」(adhyavasāya)「確定知」(niścaya) という用語のそれぞれの指示範囲を明らかにした。そして、Scherbatsky [1932] 以降、研究者たちの間で「知覚判断」(perceptual judgment) と呼ばれてきた認識が、ダルマキールティの認識論体系においてどのように位置づけられるかを示した。分別知には、(1) 錯誤知、(2) 知覚判断、(3) 推理の三種がある。(1)~(3) は全て、判断としての機能を持っている。判断とは、分別知自らの形象を外界対象として捉える認識機能である。一方、(2)(3) は、確定知としての機能を持つ。両者は「これは X であって、non-X ではない」というように、X を確定し、non-X を排除するからである。しかし、プラマーナとして認められる分別知は、(3) のみである。知覚判断は直接知覚によって既に把握されたものを確定する認識であるから、新規情報供与性を持たないのである。この分別知の持つ三つの側面、すなわち、1. 判断、2. 確定知、3. プラマーナのうち、1. 判断と 2. 確定知の間には、認識論的観点における錯誤性と実用主義的観点における錯誤性という対比がある。一方、2. 確定知と 3. プラマーナの間には、プラマーナであるが対象を確定できない直接知覚と、対象を確定するがプラマーナでない知覚判断、という両者の関係の問題が見いだされる。

そして、ダルマキールティの確定知／錯誤知の区分と、シャーキヤブッディの真理論における自律的／他律的の区分の比較を通じて、ダルマキールティの確定知の理論が、シャーキヤブッディによって真理論の文脈で継承されていることを明らかにした。シャーキヤブッディは、確定知である推理と共に、確定知である知覚判断を生み出す直接知覚をもまた、自律的真

と認めている。これは、無分別知であるが故に確定能力を持たない直接知覚を、欺かない認識としてプラマーナであることを説明するために、ダルマキールティは直接知覚に後続する知覚判断を確定知と呼び、付託の排除を論じた、という筆者の見解を裏づけるものである。

第3章では、分別知・語の対象として言及される〈共通相〉と〈アポーハ〉が何を意味するのかを明らかにした。まず、共通相と認識内形象の関係から、認識内形象が外界対象として判断された状態のものが共通相であることが明らかになった。これを共通相 I と呼ぶこととする。ダルマキールティは認識内形象と共通相 I を、それぞれ、jñānarūpa, artharūpa と呼び、両者を明確に区別している。さらに、アポーハと共通相の関係から、外界対象の差異としてのアポーハもまた、ダルマキールティによって共通相と呼ばれていることが明らかになった。これを共通相 II と呼ぶこととする。「共通相を対象とする」という表現における「対象とする」とは、分別知・語が差異としての共通相 II に立脚 (niṣṭhā) すること、あるいは、外界対象として判断 (adhyavasāya) された認識内形象としての共通相 I と結びつくことを意味する。一方、「アポーハを対象とする」という表現には、外界の差異に立脚すること、付託の排除をもたらすこと／付託のない対象に起こること、聞き手を望ましくない対象から回避させる要因であること、という三つの意味がある。